

Ⅲ 雑 録 Ⅲ

『ブッシュの戦争』の紹介」へのコメント

河野 眞 治

(I)

澤氏は前号において、ちょうどイラクとの戦争が始まろうとするタイムリーな出版で話題となったボブ・ウッドワードの『ブッシュの戦争』の紹介の労をとられている。本書の対象は9・11テロ後の100日間の、特にアフガニスタン侵攻について、ホワイトハウスや国家安全保障会議での議論の内容や意志決定の様子を描いたものであるが、アメリカ政治の一側面を理解するためにも、筆者自身も澤氏同様に「学生諸君に…一読をお勧めしたい」と強く思うものである。しかし澤教授の紹介の方法と内容に一部疑問を感じたので、以下それについてコメントしたい。

(II)

澤氏はブッシュ大統領の人柄を大変高く評価されている。ウッドワードがブッシュを「直感で動く」（この言葉自体はブッシュ本人のもの）と評価しているのに対し、同じくブッシュの言葉を使い、「常に分析し、リスクに基づいた判断を下す」人間と見なされている。具体的には指摘されていないが、「本書を読んで」そういう評価を下されているのである。さらに次のように言われる。「ブッシュが『私は教科書どおりにやる人間ではない。直感で動く人間なんだ』と言うのは、最高司令官である大統領としての閣僚に対する信頼と思いやりの表れであり、全責任を一身で背負うというメッセージである」。

一般のブッシュ評価は全く異なっている。大統領になって以後、いや大統領選の最中から、あちこちでその言語能力や知性、学力が問題にされ、「自分の勘を信頼して行動するタイプ」（三浦俊章『ブッシュのアメリカ』岩波新書、2003年）と見なされてきた。上記の本にはブッシュ自身が2002年のエール大学の卒業式で、「優等生で表彰された諸君、よくやった。C〔成績可〕の諸君、君たちも大統領になれる」とやって、大きな笑いを誘った話が紹介されている。最近になっても、ジョークにこういうのがある。ヒラリー・クリントンの新著 *Living History* に、ビルと初めてあったのはエール大学の図書館と記されているのを読んで、ブッシュはこれは

ねつ造のおそれがある、エール大学には図書館はないからだといった、というのがあった（『フォーサイト』2003年8月号）。マイケル・ムーアは「ジョージ、あなたは成人レベルの読み書きができますか？」と質問を投げかけている（『アホでマヌケなアメリカ白人』（松田和也訳）柏書房、2002年）。

ブッシュの人間評価が厳しいのは、その大統領職の正当性が厳しく問われていたからである。彼は本当に選挙で勝ったのか。開票の最後の段階で、フロリダ州で何が起きたのかについては、マイケル・ムーアの著が大変興味深い。

しかしブッシュ評価はテロを境に一変する。彼は「国民の絶対多数の支持を得たカリスマ的指導者になった」（Anthony Lewis, “On the West Wing,” *The New York Review of Books*, Vol.50, No.2, 2003. これはウッドワードの著書の書評である）。しかしこれはブッシュ本人が変化したわけではない。危機の時期に国民が精神的拠り所を求めるのはよくあることであり、アメリカではそれが大統領なのである。むしろブッシュは直感で動く人間だから、率直に国民の怒りを表現し、それが「支持された」のであり、決してブッシュ個人が「分析的」になったわけではない。

本書を読んで、確かに最後の意志決定は大統領がするんだという強い信念をブッシュが持っているという印象は与えられた。しかしそれは、行政権を一手に持つ大統領という職に与えられた権限であり、ブッシュに限らないことであろう。

（Ⅲ）

現時点で我々が興味を持つ一つの問題は、ブッシュがどの段階でイラクとの戦争を考え、決意したかという点である。澤氏の紹介も、本書の主題がアフガニスタン攻撃の時期であるにもかかわらず、イラク問題との関係が中心に紹介されている。（本書にはアフガン作戦についても、CIA要員が北部同盟幹部の前に百万ドルを置き、都合のよいように使ってほしいと説明したというような、興味深い話もたくさんある。）一部重複するが、ウッドワードの著書で述べられている点を振り返っておく。

テロ直後から、国家安全保障会議（以下会議）の席では最初の攻撃の目標を何にするかで議論となっている。ビン・ラディンとアルカイダか、テロリズム全体か、さらにテロの支援国家も含むのか。ブッシュ本人は「まずビン・ラディンから始める」と主張している。テロ翌日の12日の会議で、ラムズフェルド国防長官が既にイラク問題を提起し、「イラクも攻めればいい」と主張し、ウオルフォウイツ国防副長官が賛成している。パウエルはこれに反対し、ブッシュは「その問題の結論を出す時期ではない」とした。しかしウオルフォウイツはその日のマスコミ向け説

明会で、「犯人の責任を追及するだけでなく、隠れ家や支援システムを一掃し、テロリズムを後援する国家を滅ぼすことが肝心です」と公然と語っている。15日のキャンプ・デービッドの会議で再びイラク問題が取り上げられた。それは「アフガニスタン戦よりも成功の可能性はるかに高い軍事作戦は？」というライスの問いかけに、ウオルフォウイツが飛びつき、アフガンでの山岳戦よりイラク相手の戦争の方がずっと簡単と主張している。ラムズフェルドが今こそイラクを攻撃する時期と述べ、パウエルが反論するという前日の図式がそのまま再現している。ブッシュは「イラク攻撃にはかなり消極的だったが、討論は続けさせた」。チェイニー副大統領は「いまサダム・フセインを敵にまわすのは決していい時期ではない」と述べ、直ちにイラクを攻撃するのには反対したが、「どこかの時点でイラクを攻撃する可能性は除外しないと述べた」。この時点で、もしもイラク攻撃で「票を数えて」いるモノがいたら、賛成0対反対4、ラムズフェルドが棄権で、「イラク攻撃は否決された」（ウッドワードの評価）。

確認できることは、テロの翌日よりイラク攻撃は議論の対象になったこと、ラムズフェルド、ウオルフォウイツなどを中心に強力にその実行が主張されたこと、その中でブッシュは「消極的」で当面の攻撃対象からは見送られたことである。しかしこれが全てであろうか。ウッドワードの著書はテロ後の百日間を、大統領へのインタビューも含めて詳細に述べているが、それで全ての動きが述べられているわけではなく、また政府関係者も全てを明らかにしたわけではない。上記のアンソニー・ルイスも引用している「ワシントン・ポスト」の2003年1月12日付けの記事では、政府高官の話として次のように述べられている。「2001年9月17日、ワールド・トレード・センターとペンタゴンが攻撃された6日後に、ブッシュ大統領は『トップ・シークレット』と記された21/2頁の書類にサインした。それにはテロリズムに対する世界的なキャンペーンの一部としてアフガンでの戦争計画のアウトラインが示されていたが、その注意書きでペンタゴンに対し、イラク侵攻の軍事的選択肢について計画を立てるよう指示していた」。同記事によれば、イラク侵攻の意志決定は数ヶ月間の間に公には全く曖昧な形で、さらに政府内の反対派に対してさえ秘密のうちに決定された、またブッシュ自身はテロ後数時間とはいわないが、数日のうちに意志を固めた、と伝えている。

2002年「一般教書」の「悪の枢軸」のスピーチライター、デビッド・フラムはその回想録の中で、「ブッシュは中東での現在の米国の役割に満足しておらず、フセイン政権の転覆を望んでおり、何故イラクの独裁者は打倒されなければならないか

を世界に説明する要約的な一言を望んでいた」]、と述べている (David Frum, *The Right Man: The Surprise Presidency of George W. Bush*, Random House, 2003)。彼自身は、イラク攻撃を正当化するセンテンスを考えてくれ、とチーフ・スピーチ・ライターのガースンから頼まれている。彼の考えた当初の言葉は"axis of hatred"であったが、神学用語の好きなブッシュのことを考慮して、"axis of evil"となった。

勿論何時、どのような意志決定がなされたかについて、現時点で我々には断定できる材料はない。しかしテロの直後より、ブッシュ大統領の頭の中にイラク攻撃の問題があったこと、相当早い段階で戦争の決意を固めていたことは間違いない。

(IV)

しかしここでの問題は、どの時期にブッシュがイラク攻撃の決意をしたかではなく、むしろそのプロセスを見る澤氏の視点である。澤氏の紹介のトーンが、アメリカ国民の悲しみと苦悩を我がものとしたブッシュ大統領が、テロならびにそれを支持する国家との戦いに断固たる決意で立ち上がり、まさに世界とアメリカを救う強い味方の登場かのごとく描かれている、その点が問題である。それ故ブッシュの各時期での演説が頻繁に紹介され、アメリカの単独行動主義、先制攻撃論、困難なテロとの戦いの決意、大量破壊兵器が使われる危険性などについて、その時々アメリカ政府の見解がほとんど無批判に紹介されている。

私の誤解でなければ、澤氏はテロ以降のアメリカの行動を正当なものと考えられているようである。そうなら二つの点で疑問を呈しておきたい。第一はイラク攻撃の正当性をどこに求めるのか、という点である。米国の主張も、テロ組織の支援、とくに9/11テロとの関係、大量破壊兵器の存在、独裁者からのイラク国民の解放など時々で焦点を変えていたように思える。さらにどれを根拠にするにしても、それは独立国家の政府を他国が軍事的に打倒する根拠となるのか。これと関連するが第二に、大量破壊兵器の存在やいかにかという問題である。今の時点で(7月末)米英で問題となっているのは、大量破壊兵器が実際にあるかどうかというよりは(それはそれで問題である)、開戦前にそれぞれの政府にイラクが所有しているという確かな情報がなかったということが問題なのである。

澤氏はこのように「著者とは違う、もう一つの『ブッシュの戦争』」を見られているようだが、本書はむしろ、危機時におけるアメリカ政府トップの意志決定過程がどのようになされているのか、またそれに関わる人間関係と対立と妥協、大統領の役割などの点について、具体的に理解できるところに価値があるように思える。